

103. 近代民衆宗教における教団を越境するサークル活動に関する研究

大谷大学 真宗総合研究所 PD 研究員 藤井 麻央

概要

本研究は、民衆宗教における教団を越境するサークル活動を明らかにしながら、近代の宗教実践の一端を捉えることで、民衆宗教の歴史的意味を再考するものである。民衆宗教研究においては教団の枠を越えた視点は乏しいが、同時期の仏教研究では青年仏教徒や知識人が新聞、雑誌、書籍等を活用して、仏教を寺院の外へ積極的に発信してきた状況が解明されている。活字メディアの拡大は、民衆宗教にも等しく適用される社会環境の変化であることを踏まえ、大正期から昭和前期における金光教の高橋正雄（1887-1965）を中心に据えて、教団を越境する活動を史資料の調査と分析により明らかにすることを目指した。

高橋の教団を越境する活動は、高橋が大正6年に精神的に行き詰まり「新たな生活」を送る道程において展開し、昭和4年に創刊した個人雑誌『生』とその読者会的な「生の会」として結実しながら、さらに拡大していった。そのターニングポイントとして、一燈園の西田天香、及び、信徳舎の本城徹心と照峰馨山の出会いが挙げられた。まず、高橋と西田の間には、「財物に対する執着を離れる」実践に格闘することに独特の共感関係があったと考えられ、各々の活動が交錯する状況が生じていたと考察した。次に、高橋と真宗の本城、臨済宗の照峰の三名は、各々が追求していた「私の真実の宗教」を突き動かしていく生き方を相互的・共同的に確認する場として、信徳舎という活動を共にしたと考えられた。また、信徳舎は瀬戸内地方を中心とした活動であるが、同地方に同時期に存在した尾道求道会や更生社と、信徳舎及び生の会の関係者は重なり合い、さらに一燈園周辺の人物たちもこれらの活動に関わりながら展開していることが明らかとなった。

本研究で取り上げた高橋周辺の種々のサークル活動は、一燈園を除けば泡沫の小集団であり、歴史に埋もれてしまっていたが、決して「孤高の存在」ではなかった民衆宗教の一側面を示す多領域的宗教活動であったと位置付けられる。今後、収集した史資料から各雑誌の読者や賛同者たちの分析を進め、無名の市井の人々の宗教的関心や実践を明らかにしながら、教団と個人の関係、教団の内と外の関係等への考察を深めたい。

本助成により、史資料の収集・整理・分析等を進められたことで、博士論文後の新たな研究の基盤を築くことができた。厚く御礼申し上げます。

背景および目的

本研究は、民衆宗教における教団を越境するサークル活動を明らかにしながら、近代の宗教実践の一端を捉えることで、民衆宗教の歴史的意味を再考するものである。

民衆宗教は、近世末期から明治期に生じた民衆を担い手とする宗教を指し、その発生段階の創始者の思想を中心に研究され、教団の枠を越えた視点は乏しい。対照的に仏教については、青年仏教徒や知識人が新聞、雑誌、書籍等を活用して、仏教を寺院の外へ積極的に発信してきた状況が解明されている。仏教が寺院の外に出る近代化過程を支えた活字メディアの拡大は、民衆宗教にも等しく適用される社会環境の変化であり、実際に民衆宗教においても活用されていた。しかし、文書による布教が注目されることはあっても、活字メディアを用いた教団の外に広がる活動が注目されることはほとんどなかった。

そこで、大正期から昭和前期における金光教の高橋正雄（1887-1965）の教団を越境する活動を事例に据えて研究を進めた。高橋は昭和 10 年前後から戦後に至る金光教の改革を進めた人物だが、それ以前は教団の要職を離れて無一物の生活を送りながら、自身の煩悶と救済の体験について講演や執筆をしていた。高橋と活動を共にした人々は相互に何に共感し、どのようにネットワークを築き、何を目的に活動を共にしたのか、史資料の調査により実証的に明らかにすることを目指した。

方法

実施項目 1「高橋正雄と周辺人物に関連する資料収集と現地調査」では、主として『正受』（信徳舎発行）、『生』（生の会発行）、『更生』（更生社発行）、『まこと』（まことの寮発行）という雑誌と関連著作を収集した。これらの資料の収集に際しては、西光寺、金光図書館、三原市立図書館、西南学院大学史資料センターに協力いただいた。また、愛媛県、広島県で現地調査を行った。実施項目 2「一部の資料の目次、解題等の作成」では、雑誌類のデータ化と目次のテキストデータ化を、研究協力者の協力を得ながら進めた。また、書簡資料については一部の翻刻を行った。実施項目 3「大正期から昭和前期の思潮を踏まえた一次資料の分析」では、大正・昭和初期の宗教史の先行研究を把握しながら、一次資料を分析した。実施項目 4「成果の学会発表」では、4 本の学会発表と 1 本の論文投稿を行った。

結果および考察

高橋の教団を越境する活動は、高橋が大正 6 年に精神的に行き詰まり「新たな生活」を送る道程において展開し、昭和 4 年に創刊した個人雑誌『生』とその読者会的な「生の会」として結実しながら、さらに拡大していった。そのターニングポイントとして、一燈園の西田天香、及び、信徳舎の本城徹心と照峰馨山の出会いが挙げられた。

まず、高橋と西田の関係は以前から知られていたが、本研究において書簡等も分析することで、高橋が関与していた新生舎・大谷製麺会社と西田の宣光社構想が交錯していくような状況が確認され、両者が「財物に対する執着を離れる」実践に格闘することに独特の共感関係があったと考えられた。また、西田に感化されながら一燈園的生活を独自に体現しようとしていた柳原舜祐（後に西南学院教授）らと高橋の交流も、大正後期より築かれていることが判明した。

次に、高橋と真宗の本城、臨済宗の照峰の関係はこれまで知られておらず、まずは宗教史上無名の本城と照峰の来歴を明らかにしながら、接点のなかった三人が活字メディアを通じて出会い、本城が始めた雑誌『信徳』を中心とした信徳舎の活動を共にした経過を跡付けた。そして、彼らが追求していた「私の真実の宗教」を突き動かしていく生き方は私的な求道の営みであるが、その救済体験や宗教的欲求を相互的・共同的に確認する場として、信徳舎の活動を共にしたと考えられた。また、信徳舎は瀬戸内地方を中心とした活動であるが、同地方に同時期に存在した尾道求道会（尾道の商人・安保幸一が主催）、更生社（糸崎療養院の医師・高亀良樹が主催）と、信徳舎及び生の会の関係者は重なり合い、それぞれの活動に相互に関与していた。さらに、一燈園周辺の人物たちがこれらの活動に関わりながら展開していることも判明した。

以上のように、高橋の周囲には帰属する教団や集団の枠を越えたネットワークが形成され、雑誌刊行や集会・座談会等の活動が展開されていた。それを可能にした背景を考えるにあたり高橋の言説を分析したところ、高橋は自身の「新たな生活」を、主として「心持ち」や「気分」の変化として語っていることが要点であると考えられた。高橋においては、「思想」「行動」とは区別される「私」に存在する「生活全体を支配する」「生活気分」が重要であるとされ、「心持ち・気分」を良い方向にもっていくには、「我」を離れた生活の仕方や考え方を維持する必要があった。このように、表に現れる言動よりも、それを生み出す「心持ち・気分」の領域を重視しながら生活を追求する志向は、宗教ごとの教義や儀礼の違いによる隔たりを低減する方向に作用したと考えられた。

さらに、信徳舎の本城と照峰と高橋の間には、各々の「私の真実の宗教」（高橋にとっては金光教）の絶対性は体験的に揺らがない一方で、宗教の根源は一であるという考えのもとに、各自の生き方を追求する志向が共有されていたとみられた。この自己改革志向ゆえに、近代宗教史における雑誌と集会を組み合わせた活動の多くが

既成宗教に対する改革志向を備えるのに比べて、信徳舎の活動は運動性に乏しく、中心的人物を失うと忘れられた存在となったと考察した。

本研究で取り上げた高橋周辺の種々のサークル活動は、一燈園を除けば泡沫の小集団であり、歴史に埋もれてしまっていたが、決して「孤高の存在」ではなかった民衆宗教の一側面を示す多領域的宗教活動であったと位置付けられる。それは、仏教やキリスト教における教団・寺院・教会の外に広がる活動に近い印象を受けるが、高橋らの活動は教団や教会への対抗的意図はみられず、教団の外とは言い切れないことが興味深い論点として浮かび上がる。今後、収集した史資料から、各雑誌の読者や賛同者たちのデモグラフィックとサイコグラフィック等进行分析し、無名の市井の人々の宗教的関心や実践を明らかにしながら、教団と個人、教団の内と外の関係性への考察を深めたい。

(完)

発表論文

- 1) 藤井麻央「金光教・高橋正雄の「新たな生活」と教団内外の人間関係―大正期から昭和初期を中心に―」『宗教と社会』学会 第32回学術大会、2024年6月14日
- 2) 藤井麻央「瀬戸内地方の信徳舎：活字メディアがつなぐ超宗派の同人たち」第21回「メディア宗教」研究会、2024年7月27日
- 3) 藤井麻央「金光教・高橋正雄における「生活気分」及び「生活者」」第83回日本宗教学会学術大会、2024年9月15日
- 4) 藤井麻央「金光教・高橋正雄と西田天香」第2回 西田天香公開研究会「天香をめぐる人物たち―女性・宗教家・画家」2024年12月21日